

第10回「日本語大賞」

テーマ「忘れられない言葉」

一般の部 文部科学大臣賞 受賞作品

「ごはんごしらえ」

長崎県
福島 洋子

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

その言葉を耳にしたのは、二十二年前の六月。梅雨入り間近で、どんよりとした灰色の雲がたれこめた夕刻でした。

私は大阪のとある下町で、たこ焼き屋の前に並んでいました。といっても普通の民家の軒先で、その家のおばあさんが焼いているのです。近所の散策中に見つけたお店でしたが、やや小粒ながらカリッと香ばしく焼けた外側とふわふわの中身。見かけはいまひとつでも味はいけるし、何より安い。たしか五〜六個入りで百円程度だったと思います。

（さすが大阪、有名店からこんな小さな店まで、たこ焼きのレベル高いな）と、感服した私。小腹がすいたときなど、ちよくちよく通うようになりました。

その日も図書館からの帰りでしたが、夕食を作るのが面倒で、手っ取り早くたこ焼きで済ませることにしたのです。

ところがいつもならすぐに買えるのに、その日に限って数人が順番待ち。学校帰りの中学生たちが、

「おばちゃん、ボク十個入り。マヨネーズたっぷりかけてな」

「俺は醤油。青のりいらんで」

「ボクのは、たこ、大きいの入れてや」
などあれこれ注文をつけたため、おばあさんのゆっくりした手つきでは余計に時間がかかるのでした。

空模様は怪しいし、空腹でイライラしていた私。あきらめてよそで食べるかと思いかけたとき、ようやく前の人の番になりました。

「こんばんは。いつものやつ頼むわ」

いかにも近所の常連風のおばさん。店のおばあさんは手を動かしながら天気の話などをして、ふいに、こう訊ねたのです。

「夜のごほんごしらえ、済んだん？」

「ごほんごしらえ」——はじめて耳にした言葉です。おばあさんの口調がおっとりしていたせいか、それは〈漢字〉ではなく〈ひらがな〉の響きでした。

「いいや、今夜はダンナ遅いねん。たこ焼き食べてから献立考えるわ」

そう笑い合うふたり。ぼおっと聞いていた私の胸が、ほんわりと温かくなりました。

（「ごほんごしらえ」……なんて優しく、いい言葉なんだろう）

そのあと自分の番に——。買うつもりだった十五個入りを六個に変更し、帰宅した独り暮らしの部屋で、久々にきちんとした夕食を作ったのでした。

私が広島から大阪に越してきたのは、その二か月半前。二十七歳の春でした。

激務から心身のバランスを崩し、番組制作会社を逃げるように退職。自信喪失と自己嫌悪とで闇の中にひたすらうずくまるような生活を変えるべく、思い切って恋人が暮らす大阪へ出てきたのです。彼とは将来を約束した仲でした。

ところが引越す一週間前になって、突然の破局。すがりつきたい唯一の希望の糸が断ち

切られ、混乱と絶望の中、ほかに知り合いもない大阪へ嫌々ながら居を移したのです。

〈キタ〉と〈ミナミ〉の区別さえつかない大都会。ほとぼしる街の活気とエネルギーに圧倒され、孤独な私はさらに自信を喪失。笑顔なんてとんでもなく、息をするのもやっとう有様でした。

そんなときです。「ごほんごしらえ」の言葉と出会ったのは。

やんわりとした優しさと温かみがあつて、古めかしい表現なのに新鮮。大げさですが「ごしらえ」という言いまわしに、人間の暮らしの営み——さらには私たち現代人が忘れかけている大切なものまで込められているように思えたのです。

その日以来、私はまめに台所（ワンルームの狭いものでしたが）に立ち、三食きちんと料理を作る——こしらえるようになりました。

元々料理は嫌いではなく、九州の実家でも、広島での独り暮らし時代も（恋人と過ごすときは特に気合を入れて）色々なメニューに挑戦したものです。

近所の商店街へ足繁く通い、関西ならではの食材の名前、調理方法を教えてもらいました。テンポが速くて、最初は乱暴に聞こえた大阪弁も、慣れてくると耳に心地よく、人懐っこくて情の深い人々とのやりとりにも心を開きはじめました。

「お姉ちゃん、これが加茂ナス。みそ田楽にしたらうまいで。作り方教えてるか？」とは、ねじり鉢巻の八百屋のおっちゃん。

「えっ、てっちり食べたことないの？ そらアカン。いま一人分包んであげるさかい」これは、曲がった腰できびきび働く魚屋のおかみさん。

あのだこ焼き屋のおばあさんとも親しくなり、九州土産を持っていくなど、ささやかな交流も生まれました。

そうした日々が少しずつ、荒れ果てた心に光を灯したのでしょう。気がつけば、私はなくした笑顔と自信を取り戻しつつありました。

やがて勇気を出して求人に応募し、再就職。人の輪が広がるにつれ、行動範囲も広がり、趣味の教室などへも通うようになりました。

考えてみると、あの日の「ごほんごしらえ」が「人（人間関係）ごしらえ」になり、「笑顔ごしらえ」「勇気ごしらえ」「仕事ごしらえ」へと繋がったのです。

結局それから四年、大阪で暮らしました。そういえば、親しくなった人たちに訊ねたことがあります。

「ねえ、『ごほんごしらえ』って大阪独特の言いまわしなの？」

「ええそんな言わへんわ」

若い世代は、一様に首を振りました。唯一聞いたことあると答えたのは、五十代前半の女性のみ。

「あたしが子どもの頃、京都のおばあちゃんが言うてはった気がする……」

「ごほんごしらえ」——もはや死語に近い言葉なのかも知れませんが。それでもいいのです。だってこの言葉は、私の心の中で生き続けますから。

（あく疲れた。料理作るの面倒くさい）

いまや五十手前のおばさんとなった私ですが、たまに——いえ、しょっちゅうこう思います。そんなとき、必ず心の中で呼び替えるのです。「ごほんごしらえ」と——。

すると不思議と背筋が伸び、台所へ立てます。たとえ簡単な手抜き料理でも、こしらえる気持ちになるのです。

それは食事作りだけではなく、仕事や人間関係でも同じ。面倒なこと、途中で投げ出したくなる出来事にぶつかると、心の中で「○○こしらえ」と呼び替えます。〈作る〉のは億劫だけど、〈こしらえる〉のは楽しい。私にはヘンな思い込みがあるのかもしれない。

「こはんこしらえ」——私にとって、日々を慈しむ魔法の言葉。生涯大切に使い続けます。